

大学生における親との依存-独立の葛藤と 自我同一性の関連について

筑波大学心理学系 井上 忠典

Study on the relationship between dependency-independence conflict with parents and ego identity among university students

Tadanori Inoue (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this paper was to investigate the relationship between dependency — independence conflict with parents and ego identity among university students. A questionnaire was developed to investigate conflict with parents. It consisted of two dimension scales; the scale of need for dependency and the scale of need for independence. Another questionnaire was the identity status scale developed by Kato (1983). The two questionnaires were administered to 210 university students.

The following results were obtained: 1) the students with identity achievement status had moderate conflict with parents; 2) the students with foreclosure status gained high scores on the scale of need for dependency and low scores on the scale of need for independence; 3) there was a wide distribution of the students with moratorium status along dependent and independent dimensions; 4) the students with identity diffusion status gained high scores on the scale of need for independence.

Key words: conflict with parents, identity status, university students.

問 題

Erikson (1959)は、青年期後期の心理社会的な発達課題として自我同一性の確立を挙げたが、その確立に至るには、Blos (1962, 1965, 1967)のいう第二の個体化過程を経ることになる。そこでの中心的なテーマは、親との依存-独立の葛藤(正確には、依存欲求と独立欲求の葛藤)の問題である。いいかえると、青年期において、親との依存-独立の葛藤をめぐる問題をどのように処理しているのか、それが青年の同一性の形成に影響を及ぼし、ひいては現実生活での適応にまで波及すると考えられる。臨床場面では青年期の患者(またはクライエント)の問題行動(症状)の背景には、十分には処理されていない両親との葛藤が読みとれることが多い。その場合、心理臨床において、内的に持ち続けているその

葛藤を、治療者との関係を通じて処理することによって自己の同一性への足がかりを見いだし、現実生活への再適応を促すことが目標となる(堤, 1977)。

ここで、Blosの青年期の発達論を中心に、親との依存-独立の葛藤をめぐる発達過程を考えてみよう(Fig. 1)。児童期までは、親に依存した安定した親子関係が継続する。青年期前期に至り、急激な身体的成長と第二次性徴による生物学的変化によって、自己と身体の一様性が失われ、また、自分の身体に向けられる他者のまなざしが気になり始めるために、注意が自分自身に向かわざるえなくなる。同時に、性衝動が高まり、異性がはっきりと意識されるようになると、それまでのような親への依存(特に男子の母親への依存)が困難になる(村瀬, 1984)。このような過程の中で、親との一体感が失われることから、児童期に確立されてきた同一性が崩れて、

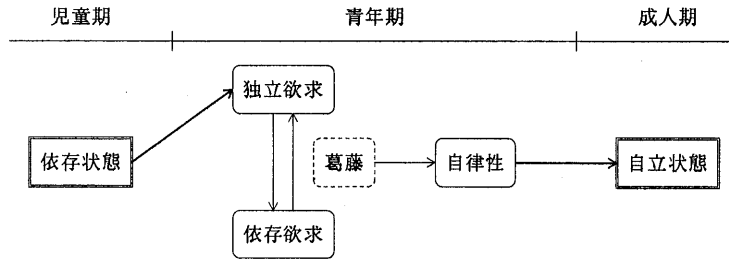


Fig. 1 親との依存-独立の葛藤をめぐる発達過程

自分とは何者なのか、という自己の存在への疑問が生じ、同一性の再構築を迫られることになる。つまり、親とは違う「自分らしさ(独自性)」を持つ別の存在としての自分、自我同一性の探求が始まる。しかし、親は依然として青年を子どもとして管理しようとするために、独自性を失わないようにする心の働き、独立欲求がさらに高まる。一方で、情緒的にも行動的にもまだ親から完全に分離して生きていけるほどの能力は備わっていないために、児童期の安定した依存状態の戻ろうとする心の働き、依存欲求が生じる。しかし、そこで再び依存したのではせっかく作り上げようとした独自性が失われてしまう。このようにして、親との依存-独立の葛藤が生じると考えられる。

この葛藤を解決する過程で、自律性が発達する(Pardeck & Pardeck, 1990)。自律性は、自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚であり、それを背景にして、他者との関係が依存しすぎてもなく、拒否的にもなっていない、適当な対人距離を保つことができると考えられる。その過程では、同性同年代の友人関係が重要な役割を果たしている(Blos, 1962)。友人への同一化や親とは異なる価値観や理想像の共有、あるいは友人からの自分のあり方の承認といったものが、「自分らしさ」を形成する上で必要な要素である。その意味では、友人は葛藤を持たない依存対象として利用される。そのような関係の中で、社会の中で是認される一定の役割を遂行する主体として、自己を自覚的に選択し直していく。つまり、自我同一性が確立されるのである。

このように、親との依存-独立の葛藤の解決を経る過程で自律性を発達させ、青年期後期に自我同一性の確立が可能になると考えられる。このような発達モデルを検証するためには、発達のな変化を継続的に追跡する縦断的な研究が求められるが、本研究では、その予備的な研究として、青年期後期にあたる大学生を対象として、親との依存-独立の葛藤と

自我同一性の関連を検討することを目的とした。

研究1：依存-独立の葛藤尺度の作成

1. 問題と目的

親を含む他者への心理的な依存性あるいは独立性といったテーマへの心理学的なアプローチは、従来、主に発達心理学の領域で行われてきた。その過程で、それらに関するいくつかの尺度が作成された。

日本での依存性に関する系統的な研究は、高橋による一連の研究から始まった(高橋, 1966, 1968a, 1968b, 1970)。高橋(1969)は、依存性を「人間に対する関心の向け方を記述する概念であり、『道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である』依存欲求を充足するためにひきおこされる依存行動のパターンである」と定義した。また、その概念について、それまで考えられていた自立性の対極概念という捉え方から離れて、発達に伴って消失するのではなく、変容するものとして捉えた。そして、依存性の発達における3つの要因を取り上げた。つまり、(1)依存行動の向けられる対象、(2)依存行動の様式、(3)依存欲求の強度である。発達につれて、(1)対象の数が増加し範囲の拡大する、(2)直接的・具体的な依存から間接的・象徴的な依存の様式への変化する、(3)必ずしも減少するとはいえず、対象との関係で変化する、と考えた。さらに、高橋(1970)は、①ともにあることを求める、②注意を向けようことを求める、③助力を求める、④保証を求める、⑤心の支えを求める、の5つの依存行動の様式を設定した質問紙を作成した。この質問紙は、それぞれの依存の様式について、その対象や強度を測定できるように工夫されており、尺度構成が十分にはされていないとはいえ、当時としては斬新なものだったと言える。

また、依存性に関する臨床的な視点からの研究として、関(1982)の研究がある。関は、依存性のあり方と自己像の肯定度によって表される適応との関連

について検討した。依存性を「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める傾向であり、人間に対する関心の向け方を記述する1つの概念である」と定義し、依存性のあり方を、「依存欲求」、「統合された依存性」、「依存の拒否」の3つの変数によって表した。依存欲求は、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求である。依存の拒否は、文字通り他者への依存を拒否する態度であり、潜在的に依存不安があると推測される態度であると考えた。また、統合された依存性は、相互依存的な他者との良好な関係を保ち、かつ、そこから得た安定感を基礎として自立的になるために、必要不可欠な依存性であるとした。関は、依存性について、基本的には高橋の概念を踏襲しながらも、人格適応の見地から依存性を捉えようとし、特に依存の拒否や依存傾向の欠如を問題とした。しかし、この概念は、先に取り上げた独立欲求の概念に近いものではあるけれども、依存性の否定的要素としてあくまでも依存性の概念の枠内で考えられており、青年期の発達に必要な肯定的要素であるという視点に欠けている。

一方、心理的な独立に関する研究には、加藤ら(1980)による独立意識を扱ったものがある。その研究では、独立意識尺度が作成され、「独立性」、「親への依存性」、「反抗・内的混乱」といった3尺度が作成され、自己概念との関連で検討された。ここでいう「独立性」とは、尺度の項目から判断すると、独自性を持つ個人として、独力で自己に関わることを処理する能力を指しているようである。その意味では、先の発達モデルで挙げた自律性に近い概念である。「反抗・内的混乱」は、本研究で扱う独立欲求の概念に近い項目もあるが、前もって設定された概念ではなかったために、項目の内容に一貫性がみられない尺度となった。

以上のように、従来の研究では、心理的な依存性と独立性がどちらか一方の概念から捉えられたり、1つの研究で同時に扱ったとしても、その相互の関係について検討されることはなかった。そのために、今までに作成された依存性だけ、あるいは独立性だけを調べる尺度を併せて実施することでは、その2つの尺度には逆相関的に重なり合う項目が多いことが予想され、親との依存-独立の葛藤を明確に取り出すことが難しいと考えられる。さらに、本研究で焦点を当てようとするのは、依存性の中の依存欲求、あるいは独立性の中の独立欲求についてであり、しかもその対象を親に限定して考えようとしている。これらの点から、研究1では、親との依存-独立の葛藤を調べるための質問紙、すなわち親に対する依

存欲求尺度と独立欲求尺度の独立した2次元の尺度から構成された質問紙を作成することを目的とした。また、前述したように、発達のにはその葛藤を解決する過程で自律性が発達し、それが自我同一性の確立に直接結びつくと考えられるため、併せて自律性についての尺度を作成し、親との依存-独立の葛藤尺度との関連を検討した。

なお、この研究を進めるにあたって、依存欲求については先に挙げた関(1982)の定義を踏襲し、「援助・慰め・是認・注意・接触などを含む、肯定的な顧慮・反応を、他者に求める欲求」とした。一方、独立欲求とは「自己の独自性を保とうとする欲求」とであると定義した。また、自律性については、「自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚であり、それを背景にして他者との適切な対人距離を保つことができる特性」と考えた。

2. 方法

- a. 調査対象：T大学大学生210名（男子76名，女子134名）を対象とした。
- b. 調査期日：平成6年2月に実施した。
- c. 質問紙：先行研究の質問項目を参考にしながら前述の定義にしたがって、親との関係での依存欲求・独立欲求・自律性を表すと考えられる82項目からなる予備尺度を作成した。「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5件法で評定させ、順に5点から1点の得点が与えられた。
- d. 手続き：調査は、授業時間の一部を用いて調査者の指示により集団で実施した。調査の所用時間は、研究2で使用する同一性地位判別尺度の実施時間も含めて、約20分であった。

3. 結果と考察

- a. 因子分析をもとにした各尺度の項目の決定
82項目について210名の反応をもとに、因子分析を行った。主因子法により因子を抽出し、ヴァリマックス法により因子軸を回転させて、3因子を抽出した。各因子への因子負荷量の高い項目数と各因子の分散の説明率は、第1因子は34項目で20.2%、第2因子は38項目で10.5%、第3因子は10項目で4.8%であり、この3因子で全分散中の35.5%を占めた。
このような因子分析の結果を踏まえて、因子ごとに0.4以上の因子負荷量をもつこと、他因子にも因子負荷量の高い項目を除くこと、依存欲求と独立欲求の両因子では、互いに他因子に相関の高い項目を除くことを基準に各尺度の項目を選定した(Table 1)。各尺度の項目数と α 係数は、依存欲求尺度は15項目で $\alpha = .90$ 、独立欲求尺度は15項目で $\alpha = .85$ 、

Table 1 依存欲求・独立欲求・自律性の各尺度の項目

	項 目
依 存 欲 求 尺 度	<p>30. 困ったときには、親に頼りたくなる。</p> <p>36. 親が「そうだ」と言ってくると、なんとなく安心してられる。</p> <p>33. 困っているときや、悲しいときには、親には気持ちを分かってもらいたい。</p> <p>40. つらい時、悲しい時に、親のことがまず頭に浮かぶ。</p> <p>56. 小さなことでも親に相談する事が多い。</p> <p>25. 何かするときには、親にはげましてもらいたい。</p> <p>46. 自分で決心できないときは、親の意見に従うようにしている。</p> <p>34. 親には何かにつけて味方になってもらいたい。</p> <p>11. 悪い知らせ、悲しい知らせを受け取る場合には、親にいっしょにいてもらいたい。</p> <p>71. ひとりで決心がつかねるときには、親の意見にしたがいたい。</p> <p>9. 夜寝るとき、時々寂しくなって、そばに親がいるだけでもいいのになあとすることがある。</p> <p>19. 難しい仕事をするときには、できることなら親と一緒にしたい。</p> <p>35. 親を失ったら、自分の生活は味気ないものになってしまうと思う。</p> <p>1. 何か重大な決断をしなくてはならないときにはいつでも親から助言を受ける。</p> <p>78. 親といつまでも一緒に暮らしたい。</p>
独 立 欲 求 尺 度	<p>38. ときどき、たまらなく家出したくなる。</p> <p>55. 親に自由を束縛されていると思う。</p> <p>2. 親に対して、許せないと思っていることがある。</p> <p>62. 親から言われたことに、よく腹を立てたりいらいらしたりする。</p> <p>64. 親に期待されていて窮屈に感じる。</p> <p>45. 親は私をいつまでも子供扱いにして、大人として認めてくれない。</p> <p>43. 親が私にやれということには反感をおぼえる。</p> <p>68. 親は、必要以上に私の欠点をとがめる。</p> <p>52. 親に対して、つい反抗的な態度になる。</p> <p>31. 親は自分を受け入れてくれていないと感じることもある。</p> <p>72. 親の言うことには、たとえ正しくても反対したくなる。</p> <p>16. 親は、私を本当は嫌っているんじゃないかと思うことが時々ある。</p> <p>24. 親の親切的申し出を、特に理由なく、断ることがある。</p> <p>5. 父親（母親）のような人とは結婚したくない。</p> <p>70. 親に逆らえないで、言うとおりになってしまうやすい。</p>
自 律 性 尺 度	<p>66. 親を頼らないで、自分自身の判断に責任をもって行動することができる。</p> <p>49. 何かに迷っている時、親に「これでいい」と聞きたいが、聞かないで自分で解決したいとも思う。</p> <p>6. 親といるよりも友達といるほうが楽しい。</p> <p>58. 自分と親の立場を尊重しつつ、必要なときには、うまく頼ったり頼られたりする方だ。</p> <p>60. ひとりで決心がつきにくい時には、親の意見に従いたい反面、自分で決心したい気持ちもある。</p> <p>13. 困っている時や悲しい時に、親に気持ちをわかってもらいたい反面、わかってもらえなくてもいいと思う。</p>

自律性尺度は6項目で $\alpha = .63$ となり、比較的高い信頼性が得られた。

依存欲求尺度は、先に挙げた定義にしたがった項目内容となっており、肯定的な顧慮や反応を親に求める欲求を表している。独立欲求尺度は、自己の独自性を保とうとする欲求であるが、親からの拘束や支配から逃れようとする内容や、親を心理的に拒否・反抗するだけでなく、親から拒否されているという内容も含まれている。自律性尺度は、先に挙げた定義にしたがった項目だけでなく、依存欲求あるいは独立欲求のいずれかの感情に支配されて行動してしまうことなく、葛藤的な感情を抱えたままですられるといった特性も含まれている。このことは、親への葛藤的な感情を保持することが、自律性の発達に関連していることを示唆している。青年期後期にあたる大学生にとって、親からの完全な心理的な独立は難しいことを考えると、自律性の獲得に至るまでの過程にある近似した要素と考えられる。

b. 依存-独立の葛藤と自律性の関連

個人ごとに、各尺度の平均点をその尺度の得点として、以下のような分析を行った。

まず、3つの尺度間の関係を調べるために、各尺度間の相関を算出した。依存欲求尺度と独立欲求尺度には相関が見られなかった($r = -.03, p > .05$)が、これは親との依存-独立の葛藤を明確に取り出すために独立した2つの尺度として尺度構成した結果である。また、依存欲求尺度と自律性尺度にも相関が見られず($r = -.04, p > .05$)、独立欲求尺度と自律性尺度には弱い正の相関が見られた($r = .15, p < .05$)。このことは、自律性には、依存欲求よりも独立欲求の方が関連が強いことを示しているが、いずれにしても単独の尺度間の相関による検討からでは、依存欲求・独立欲求と自律性の関連ははっきりしなかった。

そこで、依存欲求尺度と独立欲求尺度の2つの尺度によって構成される2次元を、人数比によって9つの領域にはほぼ等分割した。そのうち特徴的な5領

域を取り上げて、その領域の特性からそれぞれ「中間型」「葛藤型」「独立型」「無関心型」「依存型」と、親との関係スタイルについて名付けた(Fig. 2)。そして、各型の自律性尺度の得点について、1要因の分散分析を行った(Table 2)。その結果、主効果に有意な傾向が見られ($F(4,114) = 2.30, p < .10$)、LSD法を用いた多重比較を行うと、中間型は依存型よりも自律性尺度得点が有意に高かった($MSe = 0.39, 5\%$ 水準)。

調査の対象が大学生であり、年齢的にまだ経済的にも精神的にも完全には自立する状況にはないことを考慮すると、中間型は、親との依存-独立の葛藤を適度に保っており、それが自律性の高さにつながっていると考えられる。Steinberg (1985)によれば、特に青年男子とその母親の間の葛藤は普通にみられることであり、中程度の葛藤が青年の自律性の発達に重要であり、その葛藤が青年が家族システムから独立するのに役立つという。この結果は、それを裏付けている。一方、親への依存の強い児童期から青年期に入ると独立欲求が高まると考えられるが、依存型では、独立欲求が高まらなかったことが自律性の低さに結びついたのでないかと考えられる。このような特徴を持つ個人は、青年期を過ぎても家族システムからの独立が難しいことが予想される。

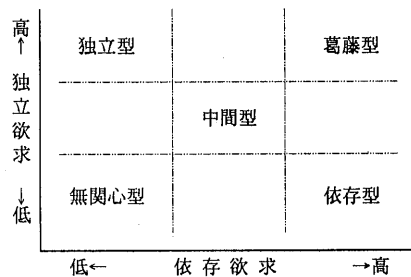


Fig. 2 依存・独立欲求尺度による9領域

Table 2 親との関係スタイルによる自律性尺度得点の分散分析と多重比較の結果

	F 値	得点の順序と平均(SD)・多重比較				
		依存型 n=23	無関心型 n=25	独立型 n=25	葛藤型 n=24	中間型 n=22
自律性	2.30*	3.28 (0.50)	3.42 (0.75)	3.57 (0.49)	3.59 (0.52)	3.73 (0.40)

注) +: $P < .10$, — でつながれた群間に有意差 ($P < .05$)

このように、依存欲求尺度と独立欲求尺度によって構成される2次元をもとに抽出された親との関係スタイルは、それぞれの尺度を単独で用いたときよりも、より明確に自律性との関連を検討することができた。このことは、親との関係スタイルによって青年の心理的発達を検討することの有効性を示唆しているだろう。

研究2：親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連

1. 問題と目的

研究2では、青年期後期にあたる大学生を対象として、親との依存-独立の葛藤及び自律性と自我同一性の関連を検討することを目的とした。

Erikson (1959)は、自我同一性を青年期において出会う心理社会的危機として捉えた。この時期の精神発達の特色は、それまでの親に依存した存在から離れて、社会の中で是認される一定の役割を遂行する自立的な主体として、自己を自覚的に選択し直していくことである。Eriksonは、自我同一性を確立することを青年期の発達課題とし、この発達段階で起こる危機を同一性拡散として捉えた。

この自我同一性を実証的に検討するためのアプローチには、大別して2つのものがある。一つは、達成-拡散を両極とする1次元の連続体として自我同一性をとらえるものである。その質問紙として代表的なものに、Rasmussen (1964)の自我同一性尺度があり、宮下(1987)によってその日本語版も作成されている。これは、青年期に至るまでの6つの発達段階における社会心理的発達課題をもとに項目が作成されている。また、日本で作成されたものとしては、砂田(1979)によって臨床的な観点から作成された同一性混乱尺度が挙げられる。

もう一つのアプローチは、Marcia (1966)によって提唱された自我同一性地位による類型化の試みである。その測定には半構造化された面接が用いられた。自我同一性概念よりも抽象度の低い危機(crisis)と自己投入(commitment)の2つの変数で定義した。危機は、いかなる役割、職業、理想、イデオロギー等が自分にふさわしいかについて、迷い考え思考する時期の有無について問うものである。自己投入は、自己定義を実現し自己を確認するための、独自の目標や対象への努力の傾注の有無を問うものである。この2変数によって、同一性達成(identity achievement)、モラトリウム(moratorium)、権威受容 foreclosure)、同一性拡散(identity diffusion)の4つの自我同一性地位に分類される。無藤(1979)は、Marciaによる原法を日本に適合するように修正し

た自我同一性地位面接を開発した。さらに、加藤(1983)は、Marciaの考え方を踏襲しつつ、多数のデータ収集が可能になるように同一性地位判別尺度を作成した。本研究では、親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連を明らかにする際に、その質的な検討を可能にするために自我同一性地位によるアプローチを採用することとした。

そして、親との依存-独立の葛藤及び自律性と自我同一性地位の関連について、前述した親との依存-独立の葛藤をめぐる発達過程を踏まえて、以下のような仮説を検証することとした。

- 1) 同一性達成地位は、危機を経た上で、現在自己投入の対象を持っている者であり、すでに親との依存-独立の葛藤を経験した後で、ほどほどの葛藤を親に対して持ち、依存欲求も独立欲求も中程度だろう。
- 2) 権威受容地位は、危機を経ることなしに、両親や社会通念が支持するものを自らの自己投入の対象としている者であり、独立欲求は弱く、依存欲求が強だろう。
- 3) 積極的モラトリウム地位は、明確な自己投入の対象を主体的に獲得しようとして、現在危機のさなかで積極的な努力を行っている者であり、依存欲求もやや強いが、相対的に独立欲求が強だろう。
- 4) 同一性拡散地位は、過去の危機の有無にかかわらず、現在自己投入を行っていない者であり、親との依存-独立の葛藤が強いためにそのような混乱状況に陥っていると考えられるため、依存欲求と独立欲求がともに強だろう。
- 5) 同一性地位と自律性との関連については、自律性が「自分の行動や感情を自分がコントロールしているという感覚」であることから、自我同一性の達成と高い正の相関があると考えられるため、同一性達成地位で自律性が高く、それ以外の地位で低くなるだろう。

2. 方法

a. 調査対象・調査期日・手続き：研究1における依存-独立の葛藤尺度の予備尺度を実施する際に、同時に同一性地位判別尺度(加藤, 1983)を実施した。したがって、調査対象、調査期日、手続きについては、研究1と同様である。

b. 質問紙：親との依存-独立の葛藤を測定する尺度として、研究1において作成された依存-独立の葛藤尺度を用いた。依存欲求尺度(15項目)・独立欲求尺度(15項目)・自律性尺度(6項目)の3つの下位尺度から構成されている。合計36項目の質問に「全くそう思う」から「全く違うと思う」までの5件法

で評定させ、順に5点から1点の得点が与えられた。個人ごとに、各尺度の平均点をその尺度の得点とした。

また、自我同一性地位を測定する質問紙として、同一性地位判別尺度を用いた。この尺度は、「現在の自己投入」「過去の危機」「将来の自己投入の希求」の3つの変数を用いて各4項目計12項目から構成されており、これによって同一性地位を判別しようとするものである。同一性地位判別尺度は、原法に従い「まったくそのとおりだ」から「全然そうではない」までの6件法で評定させ、順に6点から1点まで(逆転項目はその逆)点数化した。3つの変数ごとに合計点を算出し、その変数の得点とした。

c. 2つの尺度による群分け：研究1で行われた分け方と同様にして、依存-独立の葛藤尺度の依存欲求尺度と独立欲求尺度の2つの尺度によって構成される2次元を、人数比によって9つの領域にほぼ等分割し、特徴的な「中間型」「葛藤型」「独立型」「無関心型」「依存型」を親との関係スタイルとした。

また、同一性地位判別尺度をもとに、同一性達成地位(A群)、権威受容地位(F群)、積極的モラトリアム地位(M群)、同一性拡散地位(D群)の4群に群分けした。加藤(1983)の分類基準にしたがうと、D群とM群の中間群が極端に多くなり、依存-独立の葛藤尺度によって測定される変数との関係を調べることが困難になるため、分類基準を変更して用いた(Fig. 3)。先の4群がほぼ同数になるように群分けを行い、被調査者210名の中からA群34名、F群34名、M群33名、D群33名が抽出された。

3. 結果と考察

a. 親への依存欲求あるいは独立欲求と自我同一性の関係

親への依存欲求あるいは独立欲求と自我同一性の関係を調べるために、依存欲求尺度・独立欲求尺度・自律性尺度と同一性地位判別尺度の下位尺度間の相関を求めた(Table 3)。さらに、同一性地位間での違いを検討するために、前者3尺度ごとに同一性地位を要因とした1要因の分散分析を行い、有意な主効果がみられた場合には、LSD法による多重比較を行った(Table 4)。

依存欲求尺度については、同一性3尺度とごく弱い負の相関(「現在の自己投入」 $r = -.10$, $p < .10$; 「過去の危機」 $r = -.14$, $p < .05$)がみられるだけであった。また、分散分析の結果、同一性地位の要因の主効果はみられなかった($F(3, 127) = 1.23$, $p > .05$)。これらは、依存欲求と自我同一性には直線的な関連が見られず、同一性地位によって依存欲求の強さに違いがないことを示している。発達のには、児童期までの依存欲求が十分に満たされることが、それ以降の自己の精神的安定や対人関係の安定につながると思われる。しかし、この研究で得ら

Table 3 下位尺度間の相関(n=210)

	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求
依存欲求	-.10*	-.14*	-.02
独立欲求	-.22**	.00	-.24**
自律性	.18**	.30**	.12*

注) +: $P < .10$ *: $P < .05$ **: $P < .01$

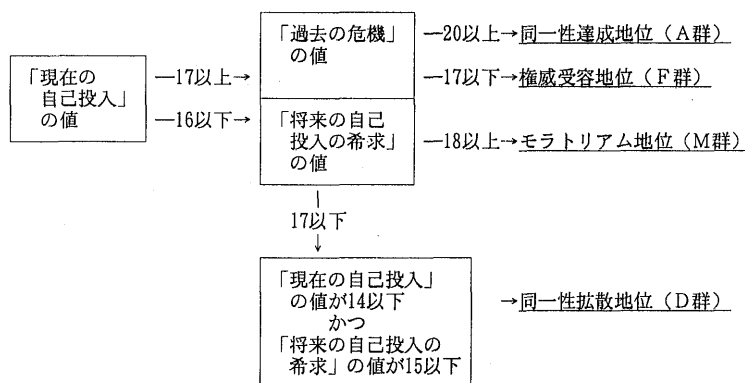


Fig. 3 各自我同一性地位への分類の流れ図

Table 4 同一性地位による依存-独立の葛藤尺度の分散分析と多重比較の結果

尺度	F 値	得点の順序と平均(SD)				多重比較
依存欲求	1.23	A群 2.56 (0.67)	D群 2.60 (0.68)	M群 2.64 (0.63)	F群 2.84 (0.59)	
独立欲求	4.42**	F群 2.33 (0.64)	A群 2.33 (0.49)	M群 2.50 (0.48)	D群 2.78 (0.59)	F A M D └──┬──┘
自律性	4.05**	D群 3.36 (0.63)	M群 3.43 (0.46)	F群 3.48 (0.63)	A群 3.79 (0.40)	D M F A └──┬──┘

注) A群:n=34, F群:n=34, M群:n=33, D群:n=30
 **:P<.01, — でつながれた群間に有意差(P<.05)

れたのは、今現在の依存欲求と自我同一性の関係であり、青年期後期にあたる大学生の発達段階では、同一性の探求に親への依存欲求のあり方はあまり関係しないのであろう。

独立欲求尺度については、「現在の自己投入」($r = -.22, p < .01$)と「将来の自己投入の希求」($r = -.24, p < .01$)に弱い負の相関が見られた。つまり、親からの独立欲求が強いと自己投入できなかつたり、自己投入の対象を探すこともできないことを示している。また、分散分析の結果、同一性地位の要因の主効果が有意であった($F(3,127) = 4.42, p < .01$)。LSD法を用いた多重比較によれば、D群とF群、D群とA群の間に有意差があった($MSe = 0.40, 5\%$ 水準)。同一性拡散地位にある個人は、権威受容地位や同一性達成地位にある個人よりも親からの独立欲求が強かった。彼らは、親からの独立欲求が強くと、自己の独自性を保とうとして親の影響下から離れることに関心が向かってしまい、そのために同一性の探求に心的エネルギーを注ぐことが難しくなっているのだらう。

自律性尺度については、同一性3尺度のいずれとも弱い正の相関が見られた(「現在の自己投入」 $r = .18, p < .01$; 「過去の危機」 $r = .30, p < .01$; 「将来の自己投入の希求」 $r = .12, p < .05$)が、この中でも「過去の危機」との相関が比較的高かった。また、分散分析の結果、同一性地位の要因の主効果が有意であった($F(3,127) = 4.05, p < .01$)。LSD法を用いた多重比較によれば、A群とD群、A群とM群、A群とF群の間に有意差があった($MSe = 0.38, 5\%$ 水準)。同一性達成地位にある個人は、他の地位にある個人よりも自律性が強く、仮説を支持する結果となった。「過去の危機」とは、自分の役割や理想などの価値観についての迷いや混乱があったかどうかを表している。親との関係で言えば、児童期

までに躰を通じて伝達されてきた親の価値観に対して疑いを持ち、自分なりの価値観を作ろうとしたかどうかを示していることになる。したがって、親とは別の独自性を持つ個人の特性を表す自律性尺度との相関が比較的高くなったものと考えられる。また、同一性達成地位を規定する変数として「現在の自己投入」と「過去の危機」が挙げられるが、自律性を基盤にして自我同一性が達成されると考えると、前者よりも後者の方が同一性達成の要因としての比重が大きいと考えられる。

b. 依存-独立の葛藤と自我同一性の関連

親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連を検討するために、依存-独立の葛藤については、研究1のbで行った分析方法を用いた。依存欲求尺度と独立欲求尺度の2つの尺度によって構成される2次元を、人数比によって9つの領域にほぼ等分割し、そのうち特徴的な5領域、すなわち「中間型」「葛藤型」「独立型」「無関心型」「依存型」を親との関係スタイルとして取り上げた。そして、同一性地位と親との関係スタイルによって、人数の分布を算出した(Table 5)。これをもとに、おおまかに分布を図示したのがFig. 4である。

A群は、中間型及び無関心型にやや多く分布していた。同一性達成地位にある個人は、依存欲求も独立欲求もあまり強くなく、親との依存-独立の葛藤を中程度に保っているか、ほとんどない状態にある。仮説では、彼らは親との依存-独立の葛藤を経験し、その葛藤がやや解決された段階にあるとした。この結果は、そのような段階に加えて、ほとんどその葛藤を解決している個人も多く含まれていたが、ほぼ仮説通りとなった。親との依存-独立の葛藤を中程度に保ちながら同一性の探求を行い、同一性が確立されるにしたがってその葛藤が低減されていくことが予想される。

Table 5 同一性地位と親との関係スタイルによる分布

親との関係 同一性地位	中間型	葛藤型	独立型	無関心型	依存型	計
同一性達成 (A群)	6	3	3	6	2	20
権威受容 (F群)	1	2	3	3	8	17
積極的モトリアム (M群)	1	3	4	4	5	17
同一性拡散 (D群)	4	5	10	2	1	22
計	12	13	20	15	16	76

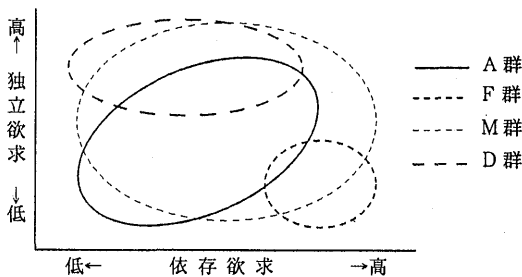


Fig. 4 各同一性地位群の分布

F群は、依存型にその半数が分布していた。権威受容地位にある個人は、依存-独立の葛藤はなく、依存欲求が強い状態にあり、仮説通りの結果となった。彼らは、過去に価値観等の迷いや混乱を経験しないで、親の持っていた価値観をそのまま自分のものとしながら、現在の自己投入を行っている。これは、いわゆる「良い子」と言われる臨床例にみられる心性であり、子どもに対する親の期待をそのまま自分の理想としている。その意味では、現時点では仮の同一性を持っていて、実生活では一応適応した生活を送っている。しかし、年齢が上がるにつれて、親への依存欲求を満たすことが難しくなることが予想され、その時点になって本格的に同一性の混乱が生じる可能性が高い。本来、青年期になると独立欲求が生じることを前提に考えると、依存欲求が強すぎるために独立欲求が生じなかったとも考えられる。それだけ親の干渉や支配が強いことが予想されるが、これを確かめるためには、親子相互の関係と青年の同一性との関連を調べる必要がある。

M群は、中間型を除いて全領域にばらばらに分布しており、特定の型への偏りはみられなかった。積極的モトリアム地位にある個人の場合には、依存欲求尺度と独立欲求尺度によって規定される2次元によってその特徴を捉えることが難しいようである。このような結果となった理由として考えられるのは、彼らは自己投入の対象を主体的に獲得しようと、現在危機のさなかにあり、親との心理的な距離

の取り方を模索していて、一義的に捉えられるような安定した親との関係が見られないことに由来しているのかも知れない。

D群は、独立型が多く、次いで中間型と葛藤型にやや多く分布していた。同一性拡散地位にある個人は、依存欲求が弱く、独立欲求が強い者が多いが、特徴となるのは総じて独立欲求が強いことである。仮説では、依存欲求と独立欲求がともに強いことが予想されたが、必ずしもその仮説は支持されなかったことになる。これは、先の同一性地位による独立欲求尺度の平均値の比較でも見られた結果である。依存欲求の強さにはあまり関係なく、独立欲求が強すぎれば自我同一性が拡散する傾向にあり、自己の独自性を保とうとする欲求が強すぎるために、同一性の探求に心的エネルギーを傾けることができなくなっている様子が窺える。

c. 総合考察

親との依存-独立の葛藤が、青年の同一性形成に影響を及ぼしているのではないかと考えて、その両者の関係を検討してきた。同一性達成地位にある個人は、依存欲求と独立欲求がほど良く保たれており、その両者のバランスを取りながら同一性の探求を行っている様子が窺われた。同一性形成に問題を抱え、現実生活での適応に支障をきたしている可能性のある同一性地位拡散にある個人は、必ずしも親との依存-独立の葛藤が強いとは言えず、むしろ独立欲求が強いことに特徴があった。また、一見適応しているように見える権威受容地位にある個人は、依存欲求が強く、独立欲求が弱いことがわかり、同一性の達成を課題とする青年期を過ぎる過程で何らかの問題が生じる可能性も示唆された。心理臨床的に考えると、現時点で適応に問題があるであろう同一性拡散地位にある個人は、独立欲求をどのように解消していくか、一方、将来的には適応に問題を残す権威受容地位にある個人は、依存欲求を解消しながらどのように独立欲求を伸ばしていくか、ということが重要になると考えられる。

ところで、高橋(1970)は、独立性(あるいは自立)を依存性(あるいは依存)の対概念ではなく、発達に

伴って変容するものと考えて、1元的に依存性を捉えようとした。長い発達過程での対人関係を依存性から捉えることは有効であったが、青年期における親との関係を考える場合には不十分であると考えられる。青年期は、児童期までの依存状態から、独立欲求が生じることによって、親との関係が急激に変化していく時期である。本研究では、親との依存-独立の葛藤尺度の2つの下位尺度(依存欲求尺度・独立欲求尺度)を用いて、同一性地位の特徴を検討した。その結果、2つの尺度を組み合わせることで、単独の尺度では導き出せなかった同一性地位の特徴を抽出できた。これは、青年期の親との関係を依存欲求と独立欲求の2次元から捉えるアプローチの有効性が確かめられたと言えるだろう。

今後の課題としては、次のようなことが挙げられる。まず、尺度に関する問題として、本研究では、親との依存-独立の葛藤を、依存欲求尺度と独立欲求尺度の組み合わせにもとづいて、親との関係スタイルとして分類して捉えようとした。そのために、その分析に統計的な検定を用いることが難しくなり、明確な結論を導き出せなかった。その葛藤を直接数量的に表す工夫が必要であろう。また、依存欲求には、高橋(1968a)が示したように、直接的・具体的な依存から間接的・象徴的依存の様式があると考えられる。同様に、独立欲求にもいくつかの様式を想定できる。それらを考慮した尺度構成により、より細かな様相を把握することが可能になるだろう。次に、調査対象の問題であるが、本研究では青年期後期にあたる大学生を対象として研究を行ったが、発達過程を考慮に入れたモデルを想定するのであれば、年齢的な変化を検討する必要があるだろう。また、親との関係には、生物学的な性発達や社会的役割の差異にもとづく性別による違いが予想される。以上の点を踏まえて、さらに研究を進めることが必要である。

要 約

青年期においては、親との依存-独立の葛藤の解決を経る過程で自律性を発達させ、その後自我同一性の確立が可能になると考えられる。そこで、青年期後期にあたる大学生を対象として、親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連を検討することを目的とした。

まず、親との依存-独立の葛藤を調べるための質問紙、すなわち親に対する依存欲求尺度と独立欲求尺度の独立した2つの尺度から構成された質問紙を作成した。併せて自律性についての尺度を作成し、

親との依存-独立の葛藤尺度との関連を検討した。

次に、親との依存-独立の葛藤尺度と同一性地位判別尺度を用いて、同一性地位によって親との依存-独立の葛藤の様相がどのように異なるのかについて検討した。同一性達成地位では、依存欲求も独立欲求もあまり強くなく、親との依存-独立の葛藤を中程度に保っているか、ほとんどない状態にあった。権威受容地位では、独立欲求が弱く、依存欲求が強い状態にあった。積極的モラトリアム地位では、依存欲求尺度と独立欲求尺度によって規定される2次元によってその特徴を捉えることが難しく、ばらばらに分布していた。同一性拡散地位では、依存欲求が弱く、独立欲求が強い者が多いが、特徴となるのは総じて独立欲求が強いことであった。心理臨床的には、同一性拡散地位では、独立欲求をどのように解消していくか、一方、権威受容地位では、依存欲求を解消しながらどのように独立欲求を伸ばしていくか、ということが重要になると考えられた。

このように、親との依存-独立の葛藤尺度の2つの下位尺度を用いて、同一性地位の特徴を検討した結果、2つの尺度を組み合わせることで、単独の尺度では導き出せなかった同一性地位の特徴を抽出でき、依存-独立の葛藤の観点にもとづくアプローチの有効性が確かめられた。

引用文献

- Blos, P. 1962 *On adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. Free-Press, New York. (野沢栄司訳 1971 青年期の精神医学 誠信書房)
- Blos, P. 1965 *The initial stage of male adolescence*. *The Psychoanalytic Study of the child*, **20**, 145-164.
- Blos, P. 1967 *The second individuation process of adolescence*. *The Psychoanalytic Study of the child*, **22**, 162-186.
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. International Universities Press, New York. (小此木啓吾編訳 1973 自我同一性: アイデンティティとライフ・サイクル 誠信書房)
- 加藤 厚 1983 大学生における同一性の諸相とその構造 *教育心理学研究*, **31**, 292-302.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念の関係 *教育心理学研究*, **28**, 336-340.
- Marcia, J.E. 1966 *Development and validation of ego identity status*. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.

- 宮下一博 1987 Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究, **35**, 253-258.
- 無藤清子 1979 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究, **27**, 178-187.
- 村瀬孝雄 1984 思春期における自我と社会 教育と医学, **32**, 116-123.
- Montemayor, R. 1983 Parents and adolescents in conflict. *Journal of Early Adolescence*, **3**, 83-103.
- Pardeck, J.A. & Pardeck, J.T. 1990 Family factors related to adolescent autonomy. *Adolescence*, **25**, 311-319.
- Rasmussen, J.E. 1964 Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness. *Psychological Reports*, **15**, 815-825.
- 関 知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究－自己像との関連において－ 京都大学教育学部臨床心理事例研究, **9**, 230-249.
- Steinberg, L. 1985 *Adolescence*. New York: Alfred A. Knopf.
- 砂田良一 1979 自己像との関係からみた自我同一性 教育心理学研究, **27**, 215-220.
- 高橋(江口)恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究, **14**, 45-68.
- 高橋恵子 1968a 依存性の発達の研究Ⅰ－大学生女子の依存－ 教育心理学研究, **16**, 1-16.
- 高橋恵子 1968b 依存性の発達の研究Ⅱ－大学生との比較における高校生女子の依存性－ 教育心理学研究, **16**, 216-226.
- 高橋恵子 1969 子どもの社会化過程と依存性：児童心理学講座(8：人格の発達) 金子書房 90-138.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達の研究Ⅲ－大学高校生との比較における中学生女子の依存性－ 教育心理学研究, **18**, 65-74.
- 堤 啓 1977 青年期障害の精神力動と治療 精神医学, **19**, 1267-1276.

—1994. 9. 30受稿—